

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520539

研究課題名(和文)コーパス利用による英語強意副詞の通時的研究

研究課題名(英文)A Diachronic Study of English Intensive Adverbs through Computer Corpora

研究代表者

西村 秀夫(Nishimura, Hideo)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：00164591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題が設定した目的は次の2つである。(1) 通時的コンピュータ・コーパスを利用して中英語期から初期近代英語期にかけての強意副詞の消長の状況を明らかにすること、(2) Helsinki Corpusの公開(1991年)以降の通時的〔史的〕コンピュータ・コーパスの編纂の動向およびそれらのコーパスに基づいてどのような研究が蓄積されてきたか概観すること。
特に前者においてはveryの使用拡大の状況、および単純形副詞と-ly形副詞(e.g. exceeding vs. exceedingly)の競合の状況を明らかにすることに重点を置いた。

研究成果の概要(英文)：There are two objectives in this research project. One is to explore the rise and fall of intensive adverbs in Middle English and Early Modern English periods based on the findings from computer corpora. Special reference is made on the expansion of the use of very, and the rivalry between flat adverbs and -ly adverbs (e.g. exceeding vs. exceedingly). Corpora mainly investigated are The Helsinki Corpus of English Texts (HC), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English 2nd edition (PPCME2), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME) and Parsed Corpus of Early English Correspondence (PCEEC).
The other objective is to make a comprehensive survey on what kind of computer corpora are now available and how they are used in the historical study of the English language. Since the release of Helsinki Corpus in 1991, diachronic/historical corpora have been becoming larger and more diverse.

研究分野：英語学・言語学

キーワード：英語史 史的コーパス言語学 強意副詞

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の研究代表者は一貫して英語史研究にコンピュータを利用する方法について考察を進めてきた。世界初の史的英語コーパスである *The Helsinki Corpus of English Texts* が 1991 年に公開されてからは、主としてコンピュータコーパスを利用した英語史研究、特に古英語期から初期近代英語期にかけての強意副詞の消長の状況に関する研究に取り組み、これまでにいくつかの研究成果を発表してきた。

2000 年代に入ってからコーパスの規模(語数)が拡大し、収録されるテキストも多様化して新たなコーパスの編纂が盛んに行われている(注1)。また、ウェブ上に公開されているフリーテキストも増加している。さらに、英語史研究の背景となる理論的研究にも新たな展開が見られるようになってきている(文法化理論、歴史社会言語学、コロケーション研究など)。このような状況の下、これまでの研究の深化、精密化の必要性を痛感し、新たな研究課題「コーパス利用による英語強意副詞の通時的的研究」を設定した。

(注1 以下のサイトを参照。

<http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/corpusfinder/index.html>

2. 研究の目的

本研究課題の申請時に以下の研究目的を掲げた。

本研究の目的は、中英語後期から近代英語期における強意副詞の消長の状況を、コンピュータコーパスを中心とした電子資料の調査を通じて明らかにするとともに、歴史社会言語学、文法化理論、コロケーション研究等の知見を援用して、強意副詞消長の要因を考察することにある。

上記の目的を実現するために当初設定した具体的な課題は以下の通りである。

(1) 強意副詞研究史の総括

コンピュータコーパス以前の伝統文法家による記述的な強意副詞研究の成果を、コンピュータコーパスを用いた研究の成果と照合する作業を通じて、それぞれの研究方法の長所・短所を明らかにする。また、最近の理論的研究の進展が強意副詞研究にどのように寄与しているかについて考察する。

(2) 調査対象の拡大

コンピュータコーパスの規模の拡大、収録されるテキストの多様化という近年の状況を受け、また、上記課題(1)の研究の精密化を図るために、調査対象とするテキストのタイプ、ジャンルを拡大する。

(3) very が確立した後の強意副詞の消長

現代英語で最も普通に強意副詞として用いられる *very* の用法が確立するのは初期近代英語期である。およそ強意表現は絶えず流

動するものであるから、本研究課題では *very* 以外にどのような語が強意副詞的に用いられたかを調査する。

(4) 強意副詞のコロケーション

近年盛んになってきたコロケーション研究の流れの中に強意副詞を位置づける。これは、強意副詞が構成するコロケーションを歴史的にたどることは、現代英語における状況を考える際に、さらには、強意副詞の将来の状況を予測する際にも有用であると考えられるからである。

本研究課題を設定したのとほぼ時期を同じくして、英語コーパス学会設立 20 周年記念企画「英語コーパス研究シリーズ」全 7 巻の刊行が決定し、「コーパスと英語史」と題する巻の編集を依頼された。各巻の編者には当該領域の研究動向の概観と展望の執筆が求められた関係で、上述の課題に加えて「通時的コンピュータコーパスの展開とそれを利用した研究の現状について」を加えた点が、当初の研究計画からの変更点である。

3. 研究の方法

本研究課題では当初、(1)言語資料の収集と整形、(2)データの検索・分析、(3)強意副詞・強意表現研究の今日の動向、という 3 つの柱を設定したが、「2. 研究の目的」の最後の段落に記した事情により、新たに「通時的コンピュータコーパスを利用した英語史研究概観」が加わったため、(1)の比重を下げる必要があったことを断っておきたい。

研究遂行にあたって用いた主要な資料・アプリケーションは以下の通りである。

① コンピュータコーパス

- ・ *The Helsinki Coprus of English Texts (Helsinki Corpus)*
- ・ *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English 2nd edition (PPCME2)*
- ・ *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)*

強意副詞に関する一連の研究の出発点となったのは *Helsinki Corpus* (1991 年公開) なので、本研究課題においては *Helsinki Corpus* の拡張版である *PPCME2*、*PPCEME* を中心に扱った。なお、必要に応じてウェブ上から得られる他の言語資料も参照した。

② コーパス検索のためのアプリケーション

・ AntConc

Laurence Anthony 氏の開発による *AntConc* は多彩なユーザーインターフェースを備えており、本研究課題で必要とされるデータの収集には非常に有効であった。

しかし、特定のアプリケーションに全面的に依存することは危険なので、*AntConc* の使用とあわせて、テキスト・エディタ上(「秀丸エディタ」を利用)で正規表現を用いた文

字列検索を行い、データ検索の正確化を図った。

以下、「5. 主な発表論文等」の項に記載した『グリゼルダの声—*The Clerk's Tale* 547-50の解釈をめぐって—』と題する論文は、コンピュータコーパスと直接の関係はないが、本研究課題で必要とされる、ウェブからの電子テキストの取得と整形、適切な検索方法の考案のための予備的な研究の成果として位置付けられるものである。

4. 研究成果

(1) 強意副詞 very の発達—very と副詞のコロケーション

本来、‘true, real’の意味をあらわす形容詞であった very が強意副詞化するプロセスは以下のように想定されている。

1) very (Adj) + N: 本来の‘true, real’の意味で、あるいは強意語として名詞を修飾する用法

2) very (Adj) + Adj + N: 限定的に用いられた形容詞の前位置に立つ形容詞としての用法(この統語位置が very の副詞化を促す要因と考えられている)

e.g. he was a *verray* parfit gentil knight (Chaucer)

3) very (Adj) + N / very (Adv) + Adj: 本来形容詞ではあるが名詞として用いられうる語 (penitent, repentant, etc.)の前に very が位置する用法 (‘true, genuine / truly, genuinely’ という意味で用いられていると考えられる)

4) very (Adv) + Adj: very が強意副詞化して形容詞と自由にコロケーションを構成する段階

5) very (Adv) + Adv: もともと形容詞であった very が副詞とも共起し、強意副詞化が完結した段階

西村(2009)では特に 4)の段階に焦点を当てて PPCEME の E1 期(1500-1570)における‘very + Adj’の出現状況を調査し、初期近代英語期に入って

- ・ very とコロケーションを構成する形容詞のタイプが急増したこと

- ・ 強意副詞 very の使用が書簡(Letters)の他、旅行記(Travelogue), 手引書(Handbook), 伝記(Biography)などのテキストタイプにも広まったことを明らかにした。

本研究課題では上記 5)の段階に重点を置き、very が副詞と構成するコロケーション網羅的記述、およびそれらが出現するテキストタイプの分析を行った。対象としたのは PPCEME の E1 期および E2 期(1570-1640)で、検索にはあらかじめ品詞(POS)タグが付されたファイル(*.pos)を使用した(注2)。

(注2 PPCEMEにおける品詞タグの付与は機械的に行われているためミスが残っていることは免れない。本研究では明らかに付与ミスと判断でき

たものは考察の対象から除外した。)

検索結果をまとめたものを以下に示す。

	E1	E2
出現数	90	172
10,000語あたりの出現率	1.586	2.737
共起語のタイプ数	45	83
-ly型副詞のタイプ数	36	64

次に各期で very と共起する副詞をその頻度数とともに示す(頻度数2以上に限定。頻度数3以上の語にのみ数値を表示する)。

E1: well (30), sore (7), sore (3), aptly, earnestly, evil, greatly, hardly, honestly, oft.

E2: well (38), kindly (19), lately (6), fair (4), artificially (3), bountifully (3), courteously (3), ill (3), seldom (3), carefully, dangerously, discretely, graciously, late, near, orderly, sore, thankfully, willingly, wisely.

上の表および共起語のリストから以下のようなことが明らかになる。

- ・ E2 期において、出現数および出現率、共起語のタイプ数、-ly 形副詞のタイプ数それぞれにおいてほぼ2倍に増加している。

- ・ 文法的に見て well には形容詞、副詞の両方の用法があるが、‘very well’を使用する際に well の品詞をいちいち意識しているとは考えにくい。その意味で、共起語を品詞別に考察する本研究課題におけるアプローチの方法には限界があるが、典型的な副詞である -ly 形副詞と very の共起数が増加している点に着目すれば、very の強意副詞化が完成段階に至ったと判断できる。

次にテキストタイプとの関連について考察する。‘very + Adv’の例が出現するテキストタイプのうち、E1 と E2 に共通するものを 10,000 語あたりの出現率とともに示す。

	E1	E2
BIOGRAPHY_OTHER	3.60	3.34
DIARY_PRIV	0.97	1.76
DRAMA_COMEDY	1.85	1.62
EDUC_TREATISE	4.33	5.16
FICTION	2.23	4.61
HANDBOOK_OTHER	1.88	2.67
HISTORY	1.67	0.63
LETTERS_NON-PRIV	3.32	4.70
LETTERS_PRIV	2.42	7.06
PROCEEDINGS_TRIAL	1.88	1.67
TRAVELOGUE	0.91	8.16

この表から、LETTERS_PRIV (私的書簡)、TRAVELOGUE (旅行記)において‘very + Adv’の増加が著しいことが分かる。書簡は書き言葉でありながら話し言葉に近い性格を持つと言われている。強意副詞をはじめとして強意表現は話し言葉で活発に用いられるもの

であるから、他のテキストタイプに比べて私的書簡のファイルに‘very + Adv’が多く見られることは不思議でない。

書簡のテキストタイプは、公的書簡であれ、私的書簡であれ、比較的短いテキストが多数含まれており、特定の書き手の癖などは薄まってしまいうので、検索結果は言語使用の実態により近いものと考えてよいであろう。一方その他のテキストタイプの場合は、1つのタイプに含まれるテキストがせいぜい2,3種類であるので書き手に固有の特徴に影響されやすい。従って上の表に見られる数値の増減についてはさらに精査する必要があることは言うまでもないが、TRAVELOGUEにおける‘very + Adv’の急増の背景にはテキストタイプに特有の言語的な特徴があるとも考えられる。この点については今後の課題としたい。

参考文献

西村秀夫(2009)「強意副詞 very の発達」堀正広・浮網茂信・西村秀夫他著『コロケーションの通時的的研究—英語・日本語研究の新たな試み』(ひつじ書房) pp. 33-56.

(2) 初期近代英語期における単純形副詞と-ly形副詞の競合

18世紀のLowthに代表される規範文法家たちは-ly形副詞の代わりに単純形(形容詞と同系)の副詞を用いることを繰り返し厳しく非難した。これは言い換えれば単純形副詞が根強く浸透していたことを示している。単純形副詞と-ly形副詞の交替は主として後期近代英語研究の領域で扱われてきているが、本研究では後期近代英語との連続性という観点から初期近代英語期における単純形副詞と-ly形副詞の出現状況を調査した。

水野(2008)は後期近代英語で特に頻繁に用いられた強意副詞として exceeding / exceedingly, mighty / mightily, prodigious / prodigiously, excessive / excessively, monstrous / monstrously, plaguy / plaguily の5つのペアを挙げている。これらのうち、PPCEMEで強意副詞としての使用が確認されたのは exceeding / exceedingly, mighty / mightily, excessive / excessively の3種類であった。以下、E1期からE3期(1640-1710)にかけてのこれらの語が形容詞・副詞の強意語となる例の出現状況と、OEDが記す強意副詞用法の初年を示す。

	E1	E2	E3
exceeding (1535)	23	26	35
exceedingly (1535)	4	4	4
mighty (a1300)	2	5	22
mightily (1539*)			1
excessive (1569)			1
excessively (c1460)			2

*動詞の強意語としての例だけが記載され、形容

詞・副詞の強意語の例は見られない。

上記以外にPPCEMEで出現数が多かったのは extreme / extremely, wonderful / wonderfully であった。その状況を以下に示す。

	E1	E2	E3
extreme (1593)		10	7
extremely (1540-54)	1	3	9
wonderful (c1400)	3	11	3
wonderfully (c1300*)		2	1

*形容詞の強意語としては1617年のものが初例。

以上のデータから次のようなことが言えるだろう。

- ・初期近代英語期においても exceeding の使用頻度が高い。
- ・extreme / extremely の出現状況から明らかに、「単純形→-ly形副詞」という単純な派生ではなく、それぞれの語において意味の変化が生じ、独自に強意副詞として発達してきたことが分かる。

上記の結果はさらに、PPCEMEに限らずコンピュータコーパスの有用性と限界を示している。すなわち200年強の期間を150万語規模でカバーする場合、調査対象とする言語現象によっては十分な資料が得られない可能性がある。同じ強意副詞でも very を調査すれば数百のデータが得られるが、比較的マイナーな語、新たに強意副詞として使われるようになった語の場合、データが得られない可能性があることはコンピュータコーパスを利用する際に留意すべき点である。今回の調査では excessive / excessively は強意副詞として早い段階から使用されていたが OED に記されているにも関わらず、PPCEMEでは用例が見いだせなかった。

一方PPCEMEは汎用コーパスとして代表性(representativeness)を念頭において編纂されているので、OEDが取りこぼしたテキストタイプから用例が得られることがある。コーパスは万能ではないが有用なツールであることは疑いない。

さらに子細に用例を検討すると単純形の強意副詞には以下の特徴がみられた。

- ・単純形副詞はもっぱら形容詞の強意語として用いられており、副詞を修飾する場合は well に限られる。

e.g. I like the gentleman *exceeding well* by site and discourse. (MASHAM-E2-H,92.56)

...his only daughter... that loved Simon *wonderfull welle*...(FORMAN-E2-H,9.192)

- ・多く用例が得られた exceeding や mighty では E1, E2, E3 の期を問わず、特定のファイルに集中する傾向が見られた(注3)。このことは単純形副詞の強意副詞としての使用が個人の好みによるところが大きかったこと、さらに上で述べた副詞を修飾する場合に共起

語が well に限られていたことも考え合わせると、単純形副詞の強意副詞への文法化の度合いが一樣ではなかったことを示していると考えられる。

(注3 例えば, exceeding は leland-e1, hooke-e3 のファイルに, mighty は pepys-e3 のファイルに頻出する。)

参考文献

水野和穂(2008)「後期近代英語における単純形副詞と -ly 副詞の交替」『英語青年』153:11 pp. 46-49.

(3)通時的コンピュータコーパスの展開とそれを利用した研究の現状

1991年に公開された Helsinki Corpus は古英語から初期近代英語までのテキストから約150万語を収集した通時的コンピュータコーパスの嚆矢となるものであるが、代表性、汎用性に重きをおいたため、収録された各ファイルの語数が原則2,000語程度と非常に小さいものとなった。そのため扱う言語現象によっては十分なデータが得られない可能性があるという問題があった。その後 Helsinki Corpus を補完・拡充するべく編纂されたコンピュータコーパスには次のような特徴が見られる(注4)。

- ①語数の拡大, 文法情報・品詞情報の付与
YCOE, PPCME2, PCCEME, etc.
- ②特定のジャンルに限定したコーパス
PCEEC, CED, CEEM, ZEN, etc.
- ③後期近代英語を対象としたコーパス
CLMET, PPCMBE, etc.

特に近年は初期近代英語と現代英語の橋渡しとなる後期近代英語に対する関心が深まっている。また1961年のイギリス英語の書き言葉を集めたLOBにならって1931年の資料を集めたBLOB-1931, 1992年の資料を集めたFLOB, さらには2006年の資料を集めたBE06など現代英語を通時的に眺める動きも出ている。Mark Daviesが編集するアメリカ英語のCOCA, COHAとの比較も可能となるので、英米両変種のより精密な研究が進展するであろう。

ただし、上記のコーパスはそれぞれが独自の方針で設計されているので、それぞれから得られた結果をどのように統合して英語の史的研究に役立てていくかが今後の課題と言える。

(注4 それぞれのコーパスについては注1でも挙げた以下のサイトを参照。

<http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/corpusfinder/index.html>)

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件) 査読なし

①西村秀夫(2015)『グリゼルダの声—*The Clerk's Tale* 547-50の解釈をめぐって—』*PHILOLOGIA* 46: 19-29. 三重大学英語研究会.

[学会発表]

なし

[図書]

なし

[産業財産権]

該当なし

[その他]

該当なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

西村 秀夫 (NISHIMURA, Hideo)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号: 00164591

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし